

エアレスはこういう手を使ってケン
ツ州における長期政権を維持してい
たのである。

この映画は、一世代ほどのケン
ツ州の田舎町で、漸次、大人の世界を開
かされていくアンワ少年（ジャック・ガ
ニョシ演）の成長あるいは開眼物語と
れば、それでいいのかもしれない。人
死を商売のタネとしか考えない俗物のア
ントワース伯父（ジャン・フェセツ演）

と、背伸びしながら懸命に大人の世界に
参入しようとするアンワ少年との対比が、
冬のケンツクの雪景色を背景にして、た
とえようもなく美しく描かれている。そ
の完成された美しさに、ことさらに来るべ
き「アベストス・ストライキ」や時の

州首相エアレスの影を重ねてみる
必要は、あるいはないかもしれない。し
かし、この伯父と少年とその他の登場人
物たちを囲む世界は、一九八〇年代の
まのケンツクとは違った世界だったとい
うことを知るのも、無意味でないように
思われる。

「誰が風を見たか」

キング監督の「誰が風を見たか」にな
ると、がらっと世界が変わる。舞台はカ
ナタ大平原のサスカチワン州（コケ地
は同州東南部のアルコラという小村）。
時代も「アントワヌ伯父さん」よりさ
らに十年ほど遡る一九三〇年代の大不況
期。カナタの平原諸州にとっては、連年

エアレスの反労働者政策は、当然、
衝突せざるをえず、そのひとつの頂点が
一九四九年の二月から七月へかけて四か
月間にわたって行なわれた「アベスト
ス・ストライキ」と呼ばれる大争議だっ
た。映画「アントワヌ伯父さん」には、
このケンツク労働史に残る大争議は登場
しない、それへの言及もない。しかし、
そういう争議の到来を必然たらしめる社
会的条件、あるいは労働条件、はずでに
存在していたということを知ってほしい。
あの一見衝動的にみえるジョス・アトラ
ンの行動も、当時のエアレスの反労働
者政策とまったく無関係とはいえない
のである。

の早魃でまさにとんだ底に陥っていた時代
の語である。

「アントワヌ伯父さん」と違って、
この映画にはW・O・ミッチェルの同名の
原作（一九四七年）がある。カナタ現代
文学の小古典のひとつと目される原作が



「誰が風を見たか」の一場面

アンワ少年の四歳から十一歳までの
順を追った成長記であるのに対し、映画
の方は十一歳の少年に時期を限つ
たという制約はあるものの、よく原作の
神と雰囲気をとらえた佳作といえる。

アンワ少年を取り巻く世界にも、
前のアンワ少年の場合と同じく、さまざ
まの問題がうずまいている。カナタ大平
原の果てしない広さは、必ずしもそこに
居住する人々の心の広さと直結しない。
事情はむしろ逆になることが多いせいか、
カナタ大平原を舞台にした文学作品には、
外的世界の広さと人間の心の狭さを対照
的にとらえたものが多い（たとえばシン

クレア・ロスの名作「私と私の家につい
ていえは」（一九四二）など）。この少
年の周囲には、子供に対する愛情のかけ
らもない精神の硬直した女教師や、偏見
と尊大のかたまりのような町の名流婦人、
有力者に取り入ることしか考えない教会
の牧師など、おおよそ心の広さとは無縁の
人たちが次々に登場し、直接間接に少年
の世界に影を落とす。その一方、俗世間
のたてまえや約束事から超越した奇人や
変人や狂人までも登場し、少年の世界に
彩りを添える。特に町外れ、平原の真つ
ただ中に住む密造酒屋（ホセ・アトラ
シ演）の無口な息子とアンワ少年と
の不思議な友情は、この映画を貫く一本
の太い縦糸となつて観客の心をとらえる。

題名の「誰が風を見たか」は、イギリ
スの詩人クリスティーナ・ロセッティの
有名な詩篇からとったものだが、この表
題の中の風、あるいは風が象徴する大平
原の自然が、この映画の真の主役なのか
もしれない。ミッチェルの原作もそのよ
うに読みとれるのである。風が主役にな
るのは、この作品に限らない。一九三〇
年代の平原州で「風」がもつていたウェ
イトは、はかり知れない。カナタの女流
詩人アン・アリオットの「風、わたした
ちの敵」（一九三九年）は、ミッチェル
の作品よりもっと冷たく厳しく「風」を
正視した詩篇として記憶されているが、
あの手をさまたげ砂塵をまき起こす風を抜
きにして、三〇年代の平原州の生活は語
れないのである。（東京大学教授）